対人サービス組織における
「規則語り」の会話分析的研究

－学童保育を事例として－

（研究課題番号　11610178）

平成11年度～平成13年度科学研究費補助金（基盤研究（Ｃ）（２））
研究成果報告書

平成14年５月

研究代表者　串田秀也
（大阪教育大学教育学部）

目　次

まえがき

第１章　はじめに　1

第２章　対人サービス組織としての学童保育　8
　２－１．集団生活サービス　8
　２－２．共同学童保育所を取り巻く組織環境　10
　　２－２－１．学童保育をめぐる「一般的環境」の変遷　11
　　２－２－２．共同学童保育所の位置づけと「タスク環境」の特徴　13
　２－３．「生活」という組織目標のディレンマ　18
　２－４．学童保育における技術とコントロール　20

第３章　保育場面の実際的状況　23
　３－１．実際的状況の構成要素　23
　３－２．保育状況の時間的構造化　24
　　３－２－１．保育計画の作成　24
　　３－２－２．保育計画の運用　28
　３－３．空間と身体の構造化　31
　３－４．子どものカテゴリー化　36
　３－５．実際的イデオロギー　40

第４章　注意の発話形式と相互行為形式　45
　４－１．注意の発話形式　45
　４－２．注意の参与構造　49
　４－３．注意への「理解の立証」と「理解の主張」　52
　４－４．対位法的行為連鎖　54
　４－５．略述とひもとき　57
　４－６．ひもときの契機としての抵抗の優越　59

第５章　注意における参与の組織化　62
　５－１．共同関与する者たちへの注意　62
　　５－１－１．協調的共同関与への注意　62
　　５－１－２．対立的共同関与への注意　66
　５－２．注意への連携参与の組織化　71

第６章　トラブル仲裁における子どもと指導員の指向　80
６－１．規則語りエンカウンター　80
６－２．「動機的に不適切な」特徴づけ　81
６－３．「中立性」への指向　84

第７章　ある規則語りエンカウンターのケーススタディ　90
７－１．先行文脈　90
７－２．召喚理由と「早すぎる」描写　91
７－３．多重的関与・注意・口論：エンカウンターの滞りと変質　95
７－４．出来事の特徴づけ：描写の再定式化と断片化された確認　98
７－５．動機表明を介した規則への結びつけ　103
７－６．描写を「補足的なもの」として扱うこと　106
７－７．謝罪という困難　110

第８章　まとめと課題　116

注　120

資料　126

参考文献　139

まえがき

この報告書は、平成 11 年度～平成 13 年度科学研究費補助金基盤研究（C）（２）「対人サービス組織における「規則語り」の会話分析的研究－学童保育を事例として－」の交付を受けて行われた研究の、現在までの成果をまとめたものである。

この研究は、学童保育所において指導員と子どもたちのあいだで交わされる「規則をめぐる相互行為」が、どのような手続きをへて行われ、どのような形式的構造を有し、そこにおいて規則がどのように利用され、可視化されるのかを明らかにすることを目的とした。この目的を達するために、研究代表者は大阪市内の３カ所の共同学童保育所において約４年間にわたる断続的な参与観察調査を実施し、フィールドノーツを作成するとともに、保育場面をビデオカメラによって記録し、そのトランスクリプトを作成して分析を行った。

調査を許可していただき、調査の期間中あらゆる面で便宜をおはかりいただいた指導員のみなさまには、言葉では表しきれない感謝の気持ちを抱いている。学童保育の指導員という仕事が（特に夏場は）たいへんな激務であること、にもかかわらずたいへん劣悪な労働条件の下で働いていること、これらは一般にはあまり認識されていない。この方々は、そのような状況の中、彼（女）らの労働条件の改善に直結することのない本調査の意義を認め、その実施を快く受け入れてくださった。この場を借りて、心からの御礼を申し上げたい。また、学童保育所に通う児童のみなさま、その保護者のみなさま、ボランティアとして行事に参加した青年のみなさまにも、ビデオカメラを抱えた部外者を快く迎え入れていただいた。心からの感謝を捧げたい。最後に、ビデオデータのトランスクリプトに際して研究補助をしていただいた学生と大学院生のみなさまにも、この場を借りて御礼申し上げる。

平成 14 年５月

研究代表者　串田秀也